

教科書に描かれた日本の自画像

—高等学校「現代社会」にみる日本の文化と伝統の特性—

菊入 三樹夫

(平成14年10月3日受理)

A Self-Portrait of Japan in School Textbooks

—How Described Japanese Culture and Tradition in Our School Education—

KIKUURI, Mikio

(Received on October 3, 2002)

キーワード：学校教育、日本の特殊性、自民族中心主義、日本というイデオロギー

Key words: school education, Japanese speciality, ethnocentrism, Japan as ideology

はじめに

私がかねてより、学校教育で使用される教科書では、日本文化がどう記述されているのか関心があった。そこで、高等学校の公民科(当時の社会科)の一科目「現代社会」の教科書には、日本文化と伝統やその特性がどのように記述されているかを示し、教科書にみられる伝統文化を中心にした日本像、いわば自己理解像がどのようなものであるかを比較検討して、報告したことがある¹⁾。当時の社会科の科目の中で「現代社会」教科書を取り上げた理由は、当時の高等学校の教育課程において、「現代社会」だけが必修科目であったこと(標準4単位、「倫理」2単位と「政治経済」2単位の両科目履修で代替することができた。)、また1989年3月告示の高等学校学習指導要領、第3節公民、第1現代社会、2内容(1)イに「日本の生活文化と伝統を理解させ、それが行動の基盤となっていることを考えさせることにより自己理解を深めさせる」と記述されているように、日本文化についてまとまった単元として学習する科目であるからである²⁾。

そしてそれゆえ、大多数の高校生が履修する影響力の極めて大きな科目であった。もともと「現代社会」は1978年8月告示の高等学校学習指導要領により発足した新科目であり、当時文部省(現文部科学省)は、中学校卒業者のほとんどが高校に進学する状況を前に、高校1年をいわば義務教育の総まとめとして位置づけ、その高1学

年に「現代社会」を履修することにするなど、「現代社会」の実施に力を入れていたことも付け加えておきたい。また私が、中学校の教科書ではなく高校の教科書を検討対象にしたのは、記述内容が中学校のものでは簡素すぎることもあるが、高校生の思考レベルでは、日本について政治的、経済的、歴史的、文化的等々、総合的に学習し考察することが可能であり、またそのように要求されているから、「現代社会」教科書はいわばその重要なガイド役になっており、それに日本像としてその教科書に記載されたことがらには、日本についてのいわば「正統的」な見解として、次代を担う青年たちに定着するものと考えられるからである。

さて先の報告において、78年の学習指導要領による「現代社会」教科書に見られる日本像の全般的な傾向を、私は多くの記述例をあげて次のようにまとめた。

ア 日本文化を初めから一様性を保持する実体としてとらえ、それをつらぬく固有の理念が厳として存在するような理解がうかがわれる。それゆえ、日本文化における地域性や多層・多様性(多民族性もふくめて)などは無視されることになる。

イ また、前記の「理念」を補強し正当なものとなしうる事例ばかりが引用され、これに反すると思われるようなものはやはり無視されるなど、事例選択の恣意性が高い。

ウ 世界中に多様に存在する諸文化のなかにおける日本文化、という位置づけよりは、外国文化に対しての日

本文化、という観点から記述されることが多く、日本文化についての主観的な（臆目、ある場合には優越論的な）評価がめだつ。

エ 文化の特性論では、あいかわらず和辻哲郎の『風土』論的な文化差異の見方（モンスーン気候を砂漠や牧場と対比）をとって、日本文化の特殊性を導き出そうとするものが多い。

オ 比較論的に記述する場合、比較の対象はヨーロッパ（西欧）に限られている。

カ 日本の権威者（例えば谷崎潤一郎、川端康成など）の日本文化についての理解が鵜呑みにされがちである。

キ 同様に知日の外国人権威者（例えばブルーノ・タウト、ドナルド・キーンなど）の文化理解も動員される。

というものである。つまり、日本文化を茶道や華道、またそこでの懐石料理などに代表されるような、桃山期に完成されその後大いに隆盛になり、いわば日本文化の結晶ともいうべき、自然環境との融合をめざすような「数寄屋文化」とでも表現しうる京都発の文化を唯一の日本文化のモデルとして、画一化する傾向が著しいのである。

ちなみに、上記ア〜キのようにまとめる好材料になった教科書記述のうち、典型的だが、学問的に見て首を傾げざるをえない記述例をいくつか挙げてみることにする。

<事例1>

……例えば、日本人は玄関で靴をぬぎ、はくというしきたりと、そのような家屋構造のなかに生活している。これは「うち」と「そと」をはっきり仕切人間関係のとらえ方と結びついている。……開け閉めの容易な襖によって仕切られているにすぎない。これは部屋ごとに鍵がかけられるドアがあり、家族個々人の生活が守られるヨーロッパ風の住居と比較すると、家族のへだてのない融和を願う日本人の生活のありかたを示している。また、あつい壁にかこまれ、窓を通してのみ外界に触れるヨーロッパ風の住居に比べると……縁側という開放的な構造を持つ日本の家屋は、自然との融和のなかに生きる日本人の生活感情を……

<事例2>

……日本の庭園は、ヨーロッパの庭園のように規則正しい人工的な秩序のなかに、自然を取り入れたものではなく、自然そのもののなかに自然の純粹な姿を追求したものである。……これらもみな、日本人の自然に従う生

き方のなかで作られたものである。日本の絵画が求めたものも、……空間を利用して緊張した統一を描く水墨画などがその代表的なものである。……ヨーロッパの皿や茶碗の規則正しい模様と比べて、日本の器の一見とりとめなく見えながら、見飽きない妙味もまた同じである。

<事例3>

……日本人は、特に季節の移り変わりに敏感である、自然を愛する気持ちが強いと言われる。文学のうえでも、四季おりおりの自然をえがき、……

<事例4>

……このように、日本人は我が国の気候・風土にあった食べ物を、祝いごとに用いたり芸術品として育ててきた。……自然と調和し、風通りのよい日本家屋は、木材の生の素材を生かし、空間の美しさを表現している。家屋を居間・応接間・食堂・寝室など、その機能別にわけて考える欧米人は、一つの部屋が居間や寝室にもなりうる日本の住居のちがいに驚くという。

<事例5>

清明心は、四季の移り変わりをしみじみ味わう心となり、自然と融合した生活態度となった。また、箸にみられる直線となめらかな面の微妙な調和、拍子木や太鼓の素朴な響き、古い家屋の屋根の美しさ、「とりあわせ」を重んじる日本料理の美しい調和、祭にみられる動と静の一体化など、日本人が年月をかけて育て上げてきた日本の伝統美を、そこに見ることができる。

このような記述が当時、検定済教科書として流通していたのである。なんとも子どもじみた自慢話、半可通の隠居の戯言か出任せならともかく、こういった類やレベルの記述の教科書が使われていたのであり、先に記した報告では私はこれらに逐一、反証をあげたり、根拠のなさを論証したのだが、ここではやめておく。

しかしこのような、まさに噴飯ものの独りよがりな自賛に満ちた、いわゆる日本文化特殊観、あるいは独自観は近年でもここそこまでまだ散見できるが、当然このような日本の自画像はあまりに非学問的であり、89年の高等学校学習指導要領が告示され、これにそった教科書が作られると、さすがに例示したような類の記述は少なくなり、現行の教科書ではよほどまともな記述になっている。現在高校生が学習に使用している教科書も、この学習指導要領に準拠したものであるが、それではどのような日本像を記述しているのだろうか。先の報告から10年を経

て、今回この場にてご報告いたしたいと思う。

1. 現行教科書の日本文化についての記述、 その比較対照

教科書の記述内容を比較対照するにあたって、私は4種類の検定済教科書を取り上げることにした。いずれも教科書として採択率が低いものではないものであり、すべて出版社、執筆陣の異なるものである。仮にそれらをA教科書、B教科書、C教科書、D教科書とするが、それぞれ文部省(当時)の検定を通過した最初の年は、A平成9年、B平成5年、C平成9年、D平成5年である。また4種いずれもB5版大で、全ページ数は、A220ページ、B208ページ、C210ページ、D223ページと大差なく、巻頭にカラー写真、巻末に重要事項の索引など、編集方針にも大差は認められない。また、日本文化についての記述に費やしているページ数は次のとおりである。

A10ページ、B8ページ、C8ページ、D6ページである。それでは、どのような記述となっているのか判りやすくするために、それぞれの章立ての見出しや小見出しを以下のように表示し、また本文中の重要とされる語句(通常、教科書では重要語句を太いゴシック書体であらわしてあり、この4種の教科書もそうなっている。)を、その下に○印表示することにする。

【A教科書】

第3章 人間生活と文化の伝統

第1節 人間生活と文化

1 人びとの生活と文化(文化とは何だろうか)

あいさつという文化・文化の多様性・文化の価値と普遍性

2 日本の文化と外国の文化(文化の違いをどのようにとらえたらよいのだろうか)

○日本人と外国文化・外国人と日本文化

精神文化・物質文化

第2節 日本の生活文化と伝統

1 日本の歴史と文化の受容(日本人の精神にどのような文化が影響を与えているだろうか)

○日本の自然的背景・日本文化の多様性とまとまり・東アジア文化の受容・西洋文化の受容

2 生活文化と現代(私たちの生活文化にはどのような伝統があるのだろうか)

食の伝統・衣服の伝統・住居の伝統・神と宗教

3 さまざまな行事と現代人(年中行事や人の一生を通じて行われる儀礼にはどのような意味があるのだろうか)

「ハレ」と「ケ」・正月・盆・月見・人の一生と通過儀礼・成年式と結婚・新しい行事

○漢字・仏教・儒教・仮名文字・わび・さび・幽玄・キリスト教・明治維新・「ハレ」・「ケ」・書院造・祭り・褌ぎ被い・八百万神・正月・盆・通過儀礼

【B教科書】

第3節 日本の生活文化と伝統

1 日本文化の形成

日本の風景・自然と生活・日本文化の源流・文化の重層性

○温帯モンスーン気候区・縄文文化・照葉樹林文化・稲作文化・文化の重層性

2 日本の生活文化

着物を着るとき・日本の衣・食・住・祭りと年中行事・伝統と現代の生活

○衣替え・春祭り・夏祭り・年中行事・民俗学・柳田国男

3 日本人の精神生活

一芸入試・道と修行・自然と生命の尊重・真の豊かさとは

○道と修行・「芸道」・世阿弥・アニミズム的・道元

4 国際化のなかの日本文化

以心伝心・同質社会・集団主義と個人・国際化のなかの日本文化

○同質性の強い社会・「ガイジン」・集団帰属性・集団行動・閉鎖的なナショナリズム

【C教科書】

第2章 日本の生活文化と伝統

第1節 日本の伝統文化

テーマ1 日本の風土と伝統(どんな暮らし方をしていたのでしょうか)

日本の四季・伝統的な暮らし・祭りと年中行事・地方の文化

○伝統的な暮らし・日本の風土・祭りと年中行事・地域の生活

テーマ2 外来文化の受容（これはどこからきた文化ですか）

和風・洋風・中華風・外来文化のうけ入れ・伝統文化と外来文化

○朝鮮半島や中国大陸からきた文化・アメリカ合衆国の文化・伝統文化・外来文化

第2節 日本の文化の特徴

テーマ1 日本人のものの見方（よその国の人と考え方が違うのでしょうか）

外国人が見た日本・目上の人に従順・日本の社会の特徴・イエ社会

○従順・甘えの社会・集団主義・恥の意識・家族主義的・帰属意識

テーマ2 同質性の高い文化（まわりの人もみんな私と同じ生活ですか）

同質性の高い社会・閉鎖性・国際人になろう

○同質性の高い文化・閉鎖性・優越感・差別感・国際人

【D教科書】

第2節 日本の生活文化と伝統

(1) 日本の風土と伝統

日本文化の形成・東の文化と西の文化・「ムラ」と「イエ」

○アルタイ諸語・南方語・第一子相続・分割相続

(2) 日本人の生活と文化

伝統的な味覚・味噌・醤油・きものとはび・一室空間と居間

○旬・ソース・味覚・書院造り・一室空間

(3) 日本人の心情と感性

自然とともに生きる・共同体の成員として・生命をいつくしむ・感動をあらわす

○四季・自然観・生命観・祭・美

2. 比較対照しての考察

見出しだけではわかりやすいとは言えないが、これらの教科書の記述は、全体的に前回のものよりも冷静で、客観性が増したものになっている。文化比較にあっても、前回にみられた西欧との比較で日本文化の特性を際立たせるといった俗流の文化比較論から、世界の諸文化、特に東アジアの文化との緊密な関連性を前提にして日本文化の特性を描き出すものへと、大きく変化している。ま

た、従来の教科書では日本社会の特徴を、柳田国男流の常民観的な民俗学のパラダイムで説明しているものが多かったが、今回の記述では従来の民俗学のみならず、世界との関連、東アジアにおける日本社会という観点が強くなり、広範な学問分野、とりわけ文化人類学や民族学の成果を踏まえた記述が多く見られるようになったことである。それゆえ、諸文化の多様性や地域性、相互の関係性を強調する方向へと変わってきている。もっとも日本文化の特性については、気候風土から説き起こし、日本の年中行事、日本人の気質や美意識、日本人の宗教意識や思考の類型へと展開していく手法において変化はない。

また、伝統的な生活風習とそれに関わる生活意識といった過去の事柄ばかりではなく、今日の現代化された日本の新たな生活風習にも触れるようになった。そのため、前回にみられたお国自慢的な日本文化独自論、特殊論を強調する度合いはかなり減じている。

たとえば、このような記述が見ることができる。

○日本社会の同質性や閉鎖性について

〔記述例1：C教科書〕

平均的な日本人は、白人の欧米人に対しては、あこがれや緊張感や劣等感をいだきがちです。テレビのコマーシャルなどに、白人女性のモデルが多く登場するのは、その一つのあらわれです。

いっぽう、欧米人以外の外国人に対しては、優越感ないし差別感をいだいてきました。アジアやアフリカの人びとを、自分たちより下にみる態度です。これはたいへんなあやまりですから、なおしていかなければなりません。

〔記述例2：C教科書〕

特殊な日本、特殊な日本人のままであっては、世界から孤立してしまいます。これからの私たちは、日本の文化を世界の人びとに理解してもらう努力をするとともに、世界から学びながら、国際人としての態度を身につけていく必要があります。

〔記述例3：B教科書〕

日本の社会の伝統的は特質である集団主義は、日本人同士が固まって、日本の文化を世界万国にまさる独自のものとみなす閉鎖的なナショナリズムにおちいる危険性をもっている。

さまざまな面で国際的な興隆が強まってきたこんにちでは、日本は、そうした偏狭なナショナリズムにお

ちいることなく、国際社会の一員として生きていかねばならない。

○多様な文化現象について

〔記述例4：A教科書〕

それらが、地域によって形や性質が異なるのは、長い年月のあいだに、それぞれの地域の環境や人びとの生活の仕方にあわせられ、また、他の文化と交流し、独自の文化に成長したためである。そこには、文化の優劣はあり得ない。新しいから進んでいるとか、古いからだめだとかの価値判断も生まれてこないのである。

○さまざまな学問分野とその成果をふまえて相対化した見方

〔記述例5：B教科書〕

かつては、東半分は落葉広葉樹のぶな林、西半分は常緑広葉樹の照葉樹林におおわれていたと考えられる。……縄文時代の中期には、西日本の照葉樹林帯で焼畑農耕がはじめられ、アワ・ヒエ・ソバなどが栽培されていたと考えられる。これは中国南部の雲南から、江南地方を経て、日本まで伝えられた文化である。

〔記述例6：D教科書〕

日本語はどこからやってきたことばであろうか。古代の日本語は、文法的にはトルコ語、モンゴル語など北方に広がるアルタイ語に共通し、単語ではインドネシア語、メラネシア語など南方語に共通項が多い。朝鮮語とはその双方に共通項がある。このように、日本語は、北と南との一種の化合物であるといえる。

〔記述例7：D教科書〕

ここでも、東日本と西日本ではかなりの差がみられた。東日本では本家を中心とした同族的関係が強く、第一子相続の傾向が顕著であったのに対して、西日本では婚姻による家同士の結びつきが強く、分割相続がみられた。女性の立場も、西の方が東よりも「ヨメ」の立場がより自由であった。神社のありかたでも、東は村の有力者に属する形だが、西では村の共同の神として村全体の力で維持されてきた。このように、東日本が家父長的で「イエ」中心であるのに対して、西日本は母系的であり、「ムラ」中心の社会であった。

○伝統文化や年中行事の記述に際して、伝統を絶対化せずに

〔記述例8：A教科書〕

さらに季節感や「旬の味」といった感覚を大切にし

た。しかし最近では、外食産業や半外食産業の発達、輸入食品の増加、インスタント食品の普及などによって日本人の食生活が大きく変化している。

〔記述例9：D教科書〕

近年、日本では、インスタント食品が大量に供給されるようになった。このため、伝統的な食べものの占める位置は低下した。

〔記述例10：A教科書〕

現代社会の都市への人口集中と農村の人口減は、こうした伝統的な行事のいくつかを、地域によっては消滅・変化させてきた。一方新しく定着してきた行事がある。例えば12月25日のクリスマスなどがその例である。もともとなかった行事が日本に定着した理由は、単に商業主義からとはいきれない側面もあると思われる。

記述のこのような改善がなされた背景として、この10年の間の社会の変化、日本社会の急速なグローバル化を無視することはできない。日本社会もヨーロッパ先進諸国と同様に、多様な理由や事情からいろいろな国から多くの外国人が流入し、日常生活レベルにおいても異なる生活様式や多様な民族性を意識する機会がずっと増えたことがある。また、歴史教科書での、過去の日本がおこなった侵略戦争の自覚に乏しい記述に対する近隣アジア諸国からの批判もあった。いまだに頻発する有力政治家の無知で配慮に欠ける発言が、かえってアジアのなかの日本という位置づけや日本社会の多様性や重層性を自覚させることになった³⁾。

一方で、歴史学・考古学研究の分野にあっても、この十年間で大きな進展が見られた。私たちが中高生時代に学習し、暗記もした歴史上の定説が相次いで崩れてしまったことはきわめて大きな出来事である。たとえば、佐賀県吉野ガ里の集落住居跡はその防衛構造で、稲作に従事し平和な弥生時代という、終戦直後の登呂遺跡の発掘以来できあがっていた従来の弥生時代観の変更を余儀なくさせた上に、他の発掘作業の成果はその弥生時代が定説よりもかなり前に始まっていたこと、また稲作技術の伝播は縄文時代まで遡ることが確認されて、弥生＝稲作＝集落国家という、日本文化の基盤や民族性を稲作定住農耕に求めてきた従来の日本文化観を大きく変えさせることになった。同様に青森県の三内丸山遺跡の発掘復元は、縄文＝狩猟採集社会という歴史学上の大原則を根本から変更させ、縄文時代が通説よりもずっと早くから始まっ

ていたこと、縄文時代にも粟や里芋の栽培をはじめとする農業的生産社会であったこと、大建造物を設立しようとするような権力、統治システムの存在がうかがわれることなど、私たちの縄文時代観を大きく変更させたのである。

これらの考古学上の進展とはまた別に、歴史学においても、たとえば網野善彦氏を中心とした歴史学者達のあげた一連の成果が社会的にも受け入れられて、影響力にきわめてめざましいものがあった。従来、歴史的に日本社会は稲作農業を基盤とし、それに立脚した権力や文化が形成されてきたとする、オーソドックスな歴史理解に対して根本的な見直しをせまったのである。この新たな歴史研究の成果に立てば、「士農工商」に代表される単層的な身分社会としての日本社会は、ずっと幅広い躍動感に満ちたものへと変身する。

ここではあまり詳しく触れられないが、中世史における日本社会の多様性と流動性を網野氏は説得力を持って描き出した。たとえば、中世生活史における女性の積極的な活動（一例として、桂女などの経済活動がある）、清水寺や大山崎の所属民の活動が近世以降の被差別民観では解明できないこと、また、近世の江戸社会にあっても、従来の「士農工商」の身分秩序による社会観は、実際の姿とは異なるものであり、稲作農耕に依拠せず、商業流通を握る「水呑百姓」階級による経済活動や、いわゆる被差別民の多様な生産経済活動が当時の日本社会を大きく支えていたことを明らかにした。その結果従来の

固定的・一元的な身分社会という理解に立った日本文化観にたいし、かなり躍動的で多様性に満ち、重層的な日本社会とその文化を、きわめて明快に浮き彫りにしたのである。

その他に民俗学や人類学、社会学上の進歩や一般社会への普及なども歴史学や考古学における十年間の進歩と同様に、著しいものがあった。これら諸学問領域の進展に相応して、現代社会の教科書も敏感に反応したのである。

だが、このような新たな学問的な展開にも関わらず、この4教科書とも相変わらず日本文化に関する記述では、記述量の多寡の相違はあるものの、日本の文化特性を解説する場合によく見られるパターンの手法にまだ頼っている所もあり、記述の展開と内容にはさほどの違いはない。

まず、日本の地理的風土の特性（モンスーンや四季の変化）からはじめ、それに規定される生産形態（稲作農耕）と生活形態（家屋の特性やハレとケ、祭りなどの年中行事）をあげ、そしてこれら生産生活形態に由来する社会関係や規範と日本人の気質（同質性や集団主義、閉鎖性など）に記述が及び、これにアニミズム的な自然観に仏教的な世界観が加わり、独自の繊細な自然感覚を保持しているとの脈絡になっている。であるから、どうしても日本文化特殊論に傾かざるをえず、学問的な冷静さを欠いたおかしな記述もまだ見られることになる。日本

西 欧 文 化	日 本 文 化
個人の人格あるいは人権を尊重する個人主義	へだてのない「うち」（個人の所属する集団）を尊しとする家族主義
国家その他の社会は、契約にもとづく横の人間関係	国家その他の社会あるいは集団は、親と子のような縦の関係
内面的な良心を問題にし、良心の呵責に苦悩する「罪の文化」	自己の所属する集団の外面的な恥を気にする「恥の文化」
原理・原則を重視する父性社会	全体を包みこむ愛や寛容を、法規を超えて尊いとする母性社会
分析的・合理的思考と自発的・合理的な行動	直感的・情緒的思考と受容的・情感的な行動
自然や人間との対立のなかに自己を考える	自然や他人との和合・調和のなかに自己をみる
石の文化、肉食の文明	木の文化、米食の文明

図表1 日本文化の特色に関する諸説(A教科書P.69より)

の生活文化に特殊な(そういった特殊なものはどの文化にも存在する。だからそれぞれの文化なのであるが)事象を取り上げて、日本文化の独自性をあげつらうもので、お国自慢やエスノセントリズム的な記述以外にも、この記述で何を伝えたいのか今一つ釈然としない知識もある。たとえば、次のような記述例が存在する。

○国内外の古典的権威に頼り、日本対西欧という対比で文化を位置づける。

〔記述例11：A教科書〕

また、アメリカ合衆国の文化人類学者ベネディクトは彼女の著作『菊と刀』で、ヨーロッパ文化を「罪の文化」、日本の文化を「恥の文化」ととらえて、ヨーロッパ人の行動様式の根底には罪の意識、日本人のそれには、他人の批判や世間の目を気にする恥の文化の意識があったとした。

和辻やベネディクトのほか、近年では社会心理の河合隼雄や林道義の言説も見られる。〔記述例11〕の対比表(図表1)は「日本文化の特色に関する諸説」とことわり、「諸説」とはしているが、この著者はやはり、この「諸説」に固執している。

〔記述例12：B教科書〕

フランスの人類学者レヴィ=ストロースは、数ある工業社会のなかで、日本はアニミズム的な指向が今なお生きている最後の社会であるといっている。

○この記述を通して何を伝えたいのかははっきりせず、ま

たその根拠もよく分からないもの。

〔記述例13：B教科書〕

最近、大学入試で「一芸入試」という制度がある。……日本では昔から、一芸に秀でている人は、全体としてもすぐれた人格の持ち主であると考え傾向があった。

〔記述例14：A教科書〕

こうした社会という文化のほかに、「ものを数えるときにつける単位の言葉が世界でもっとも豊富なのは日本語である。たとえば動物を1匹、1羽、1頭などというようにするのは、すべてのものを大切にするためであろうか」という、数え方の文化に触れた意見もある。(図表2)

〔記述例15：D教科書〕

日本の伝統的な住宅は、室町時代の書院造りを原型にしている。日本の住宅は、障子や襖など紙1枚で間仕切りされ、はずせばつながるという一室空間型である。堅い石やレンガで作られ、板によって仕切られた個室によってできている西洋の住宅とくらべると、出入り自由な空間である。日本の住宅は、家族関係のありかたとも深くかかわった構造をしている。個室が増えたこんにちでも、居間に家族全員が集まってくるなど、日本の伝統が形を変えながらも残っているのである。(図表3)

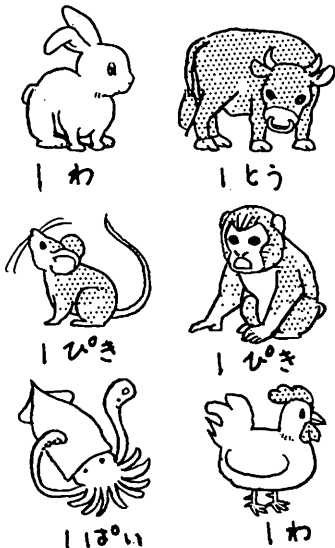
〔記述例16：D教科書〕

日本人の生活の場は、おおむね穏やかで四季の変化に富み、動植物の生存にも適した自然に恵まれてきた。きびしい自然条件とのたたかいを強いられた地域の人々にくらべると、自然を友としその変化に親しんできた。そのため日本人は、独特の自然観・生命観を身につけてきたのである。その一つが、「生きとし生けるもの」すべてに対する共感であろう。自然の征服者としてではなく、ともに生きるものとして、自然との調和を求めてきたのである。

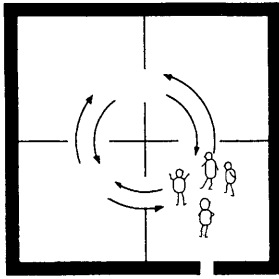
〔記述例17：D教科書〕

「花・鳥・風・月」といわれるように、日本人は、移りゆく自然を感じ取り、愛でてきた。『万葉集』にあるように、古くからの日本人は自然にふれ、その感動を表現してきた。日本人にとっては、清明としての自然の活動に触れることこそ、美を感じとり、心を豊かにするものであった。

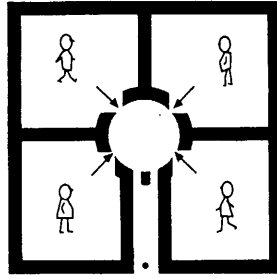
また、変化に富んだ四季の風土論、そこから生ずる



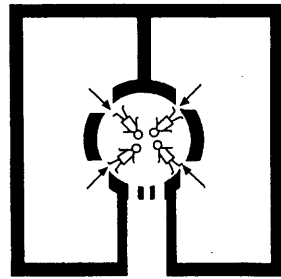
図表2 (A教科書P.69より)



日本式 家族成員は別々の部屋にいることは少なく、群をなしていることが多い。部屋は機能によって分けられている。各部屋の仕切りは弱く、家全体が共通の場を形成している。外に対してはカベが厚い。



イギリス式 一つの家の中に、それぞれ個室がはっきりあって、自分だけの場をもっている。他の家族成員との接触は、居間・食堂などのような共通の場で行われる。



インド・イタリア式 個室はあるが、共通の場がたいへん重要な機能をもっていて1日の大半をそこで過ごす。共通の場は、外に向かって大きく開かれている。

(中根千枝『適応の条件』より)

図表3 家族成員の配置と動きかた(D教科書P.133より)

日本人の美意識や人間関係形成の特性や生活観など、日本文化の特性論は容易に日本文化特殊観へと連なりやすいが、これに類する記述はいまだに健在である。日本人の行動を律する道徳律を、相変わらずベネディクトの『菊と刀』に求めたり、根本的なところで日本文化理解や解釈を柳田民俗学や和辻風土論に頼っているのである。ケッペンによる古典的な気候区分でも数ある気候区のみを恣意的に選り出して、気候の相違から人間精神の特性対比をした和辻の風土論の欠陥は、今日では指摘し尽くされた観がある。柳田民俗学の常民論も、緻密なフィールドワークなどその後の民俗学の発展のなかで、あながち一般性をもったものではないことが論証されている。こういった成果の上に、網野善彦氏らをはじめとした歴史学や他の分野の成果が歴史や文化の解釈を一段と幅広く説得力あるものにさせたにもかかわらず、柳田学や和辻学を持つ権威の呪縛から、教科書執筆者や教科書調査官は解放されていないと言ってよかろう。

この限りにおいて、日本社会のなかに多様に息づいているいわゆるマイノリティの文化、たとえばアイヌ文化や琉球の文化、かつての移動遊行の民や非農業生活民の文化、またいわゆる被差別民の生活誌や女性史、さらに在日外国人など、日本文化の重要な構成要素であり、日本文化を幅広く奥深い豊かなものにするのに重大な貢献をした多様な存在を排除し、例外的なものとしてしか位置づけることができず、誤謬に陥ってしまうことになる。

だが、この單元においてはこれらの存在への言及は、どの教科書もない。

まとめとして

2002年4月から導入された、1999年3月告示の新高等学校学習指導要領では、「現代社会」の内容は大きく変わり、今まで論じてきた日本文化についての單元は割愛され、「倫理」で学習することになっている。学習指導要領の公民科第2倫理2内容(1)ウの項に次のような記述がある。

ウ 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本人に見られる人間観、自然観、宗教観などの特質について、わが国の風土や伝統、外来思想の受容に触れながら、自己とのかかわりにおいて理解させ、国際社会に生きる主体性ある日本人としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

グローバル化が急速に進行するなかで、自らの文化をよく知り、世界の中で自らがどんな所に位置するかを理解することの大切さは言うまでもない。それは、世界規模の共生社会の実現が不可避であることによっている。だが学習指導要領のこの文章は、「日本人に見られる人間観」とか「日本人としての在り方生き方」とあるように、極めて不用意に「日本人」が記述されている。しかしそもそも「日本人」とは何なのか。法的な、国籍とし

での日本人ならば、近年日本国籍を取得した日本人には共通する「人間観」があるかどうか疑問だし、既述したようにアイヌ文化や離島・僻地といった地域性を考えあわせれば、一様性の高い「人間観」が存在しているとはいえないし、すると共通する人間観から発する共通する「日本人としての在り方生き方」があるわけではない。

それにもかかわらず、教育行政は一貫して国家への帰属性を高めることを方針としている。そしてこの「日本人」とは、明治以来権力の側が宮々と自己アイデンティファイしてきた、周囲の諸民族、諸文化とは画然と異なるとするものであり、これに古くは柳田民俗学が動員され、中根人類学も協力しているのである。ちなみに、このような「標準的日本人」の形成過程から、標準的ではない、すなわち日本社会のマイノリティが作り上げられ、差別もまた産み出されるのである。そしてこの文化や伝統（つまり日本というイデオロギー）を身につけた「主体性ある日本人としての在り方生き方について自覚を深めさせる」ことのもつ意味については、文化論のレベルでばかりでなく、政治や公教育など多くの観点から批判的におさえなければならぬであろう。

教科書に記述された日本文化や伝統についての偏見ともいえる、このような一定の傾向は、実はこの学習指導要領の文言、文科省の採用するイデオロギーとしての日本観にそもそも原因があるのだ。2002年7月29日に公表された中央教育審議会（烏居泰彦会長）の答申に、「日本人としての自覚を持ちつつ、人類に貢献する……」、「我が国の伝統、文化などを次代の日本人に……」、「日本人としてのアイデンティティなどが……」とあるように、教育基本法に「愛国心」を盛り込もうとする動きも同一の動きのあらわれである⁴⁾。

ところでこの「倫理」は選択科目である。教員の配置から考えても「倫理」を開設する高等学校は少ないであろう。また、今回変更された学習指導要領より新たに開設された「総合的な学習の時間」は、「地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく創意工夫を生かした教育活動」⁵⁾であるから、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動」⁶⁾や「生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化をはかる学習活動」⁷⁾なので、日本の伝統や文化に焦点をあてた学習は可能であろう。しかし、この時間はその性格からして学習の手引きとし

での教科書は存在しない、それゆえ指導にあたる担当の教師は、幅広い知識と何よりも偏見にとらわれないものの見方のできる柔軟な思考力を持つことが必要である。

しかしながら学習指導要領の他所には、「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。」⁸⁾とあり、「日の丸」・「君が代」が国旗・国歌として法制化されるずっと以前から、学習指導要領は国旗・国歌の語を使用しており、これらの実施を義務づけている。これは文部省・文部科学省の一貫した方針であり、それゆえ日本の伝統や文化は、特殊な感覚、特義性をまとって記述されがちである。この点、先に論じたように、バランスがとれ冷静な記述へと教科書の内容が徐々にとはいえ変化してきたのに、一抹の不安を禁じえない。

新しい学習指導要領に拠る「倫理」教科書が出そろい次第、日本の伝統や文化、すなわち日本の自画像がどのように描かれているか、また機会を得てご報告申し上げたいと思う。

注

1) 「国際化の中での社会科教科書の現況」、『世界新教育』第33号 1992

2) なお、第2倫理では

(3)国際化と日本人としての自覚 日本の思想や文化の特色について理解させ、国際社会における主体性ある日本人としての在り方生き方について思索を深めさせる。

ア 日本の風土と日本人の考え方

日本人に見られる人間観、自然観、宗教観を日本の風土とのかかわりで考えさせる。

とある。

3) 例えば元内閣副官房長官、元北海道沖縄開発庁長官で北海道選挙区の鈴木宗男議員（当時）は、アイヌ民族はすでに同化されたと発言し、アイヌ民族の人々の反発をうけ（2001年7月3日付朝日新聞など）、またウタリ協会の内部対立にまで発展した。相前後して経済産業省の平沼赳夫大臣（当時）も同様の発言をしている（同上）。ちなみに氏は、日本の国債の評価ダウンでポツワナと同列に評価された際、ポツワナ及びポツワナの人々を傷つける発言もしている。その後、尾身幸次沖繩・北方担当大臣（当時）は「日本は単一民族だ。日本人といえば大和民族だ。」

と発言した(2001年11月30日付朝日新聞)。また日本の植民地支配を肯定的にとらえ、日中戦争をやむをえない戦争、南京事件やいわゆる従軍慰安婦問題は存在しないとする政治家の発言は枚挙に暇がない。

- 4) 2002年7月29日付毎日新聞1・2面
2002年8月2日付朝日新聞11面「私の視点」岡本厚
- 5) 平成11年3月告示高等学校学習指導要領
第4款 総合的な学習の時間1(時事通信社版p.8)
- 6) 同3ア(同版p.9)
- 7) 同3イ(同版p.9)
- 8) 第4章特別活動 第3指導計画の作成と内容の取扱い 3(同版p.368)

文 献

- 学習指導要領については次のものを使用した。
「文部省発表 高等学校学習指導要領 全文と改訂の要点 平成元年(1989)改訂版」明治図書出版株式会社 東京 1989
「高等学校学習指導要領 平成11年3月告示」時事通信社 東京 1999
- 検討対象にした教科書は次の4種である。(氏名は筆頭著者・編集者)
「高等学校新現代社会改訂版」清水書院 小牧治 1997.3.31.文部省検定済
「現代社会」東京学習出版社 飯坂良明 1993.3.31.文部省検定済
「現代社会改訂版」山川出版社 島田晴雄 1997.3.31.文部省検定済
「新高校現代社会」一橋出版 二谷貞夫 1993.3.31.文部省検定済

Summary

High school students in Japan learn the Japanese culture and tradition in a subject “contemporary society”.

We can see many strange, rather self-praiseworthy and ethnocentric descriptions in some textbooks that were published before over ten years. And in these descriptions we find an idea or an ideology that Japan is unique and superior in spite of contemporary Japanese democratic education system.

But in the latest textbooks cool and objective descriptions increase gradually. These emphasize the mutual relations with East Asian cultures in history and the cultural exchanges in the modern Japanese consumption society. However, we can still find some strange descriptions too, these conceive problems in the internationalizing society.